

## ラグビーと私

県立スポーツ研修センター、学校体育研修課

主任指導主事兼課長

奈良 昭 男

昭和42年10月、上尾運動公園陸上競技場において第22回国民体育大会（埼玉国体）の開会式が盛大に挙行された。埼玉教員ラグビーチームの一員として出場することとなった私は、はからずも県選手団の旗手に選ばれ、当日は使命感に緊張しながら夢心地で行進したことを今でも鮮明に思い出することができる。

前年、私は埼玉の教員に採用され、母校（不動岡高校）に勤務していた。その年の6月頃、出張の帰りであったと思うが、浦和市内で大学の先輩である吉田先生（現在所沢高校教頭）と偶然出会った。その時先輩が「元気か」「どうだ、来年国体があるけど教員チームに入ってラグビーをやってみないか」と誘ってくれた。私は大学時代陸上部に所属していたが、合宿所がラグビー部と同居していた関係で部員とも親しく付き合い、ラグビーについてもかなり興味をもっていたので、先輩の一言に迷わずラグビーをやってみようという気持ちになってしまった。この先輩との幸運な出会いが、私にとってラグビーの始まりであったような気がする。

教員チームに加入した私は、ラグビーのイロハから指導を受け、必死になって練習に取り組んだものでした。指導してくれた森先生（現埼玉工業大学深谷高等学校教諭）、高橋先生（現松山高校教頭）、吉田先生（現所沢高校教頭）、金子先生（現久喜工業高校教諭）をはじめ、同期に加入した小畔氏（現高体連理事長）、小野氏（現騎西高校教諭）岡松氏（現川越高校教諭）、佐野氏（現福岡高校教諭）、岩瀬氏（現蓮田高校教諭）やラグビーをこよなく愛した松井先生（現県体育課長）、小原先生（現川越高校定教諭）、深町先生（現松山高校教諭）などの懐かしい顔ぶれを思いおこすとき、若かりし頃の記憶が昨日のこのようにオーバーラップしてしまう。

埼玉国体の年、昭和42年に入ると尾崎氏（現深谷高校教諭）、高森氏（現筑波大学）、伊藤氏（現行田高校教諭）、北島氏（現川越工業高校教諭）、



山中氏（現県体育課）、田口氏（現熊谷西高校教諭）などの新しいラグビー仲間が加入し、教員チームとしての陣容が整っていった。岩手遠征を行ったり、山中湖畔で合宿をしたり、国体に向けて着々と準備が整っていった。

試合や合宿もさることながら、ラグビー仲間の豪快さにびっくりしたのもこの頃である。岩手遠征のおり、駅に見送りにきた小畔氏の彼女（現奥さん）を見て、「小畔、お前が今まで付き合った女の中で今度のが一番美人じゃないか」と奥さんの目の前で平然と言ってしまった吉田先生。（私には絶対言えないセリフである）奥さんは20年以上たった今でもそのことにかかなりこだわりをみせている。寝台夜行列車の中で一晩中缶ビールを飲み続け（いったい何本飲んだのだろう）騒いでいた小野氏と伊藤氏（小便はどこにしたのだろうか）。翌日ケロッとして試合に臨んだタフネスぶりにもあきれてしまった。山中湖での合宿のおり、マージャンで役満を上がり、嬉しさのあまり玉をぶらぶらさせながらフルチンで「やった。やった」と叫びまわっていた理解に苦しむ田口氏。あげれば枚挙にいとまがない。このような雰囲気の中で段々と毒されていったのも事実である。

埼玉国体の1回戦の相手は岩手教員チームであった。私にとっては公式試合のデビュー戦であったが、楽勝の相手と見ていたチームに不覚にも敗けてしまい（試合はほとんど相手陣内で押しまくっていたが）、今までに経験のない悔しさを味わった。その晩は、ほろ苦い自棄酒を一晩中仲間と一緒に飲み明かしてしまった。

翌年の福井国体では奇しくも1回戦で再度岩手教員と対戦した。前年のことがあったので、全員が親の仇を討つような気持ちで戦い、圧勝して溜飲を下げることもできた。

一番思い出に残る試合は、何とんでも長崎国体での優勝候補でもあった大分教員との対戦であろう。相手の猛攻を全員が狂ったようなタックルで抑え、数少ないチャンスを確実にものにして僅

差で勝った試合は、終生忘れることのない思い出だ。特にこの時の高橋先生のハーフウェイライン近くからのペナルティゴールの成功は効果的であった。

ノーサイドの瞬間、全員が雄叫びを上げながら抱き合っていたとき、本当にラグビーをやつて良かったなああと心から思ったものだった。

その後、岩手、和歌山国体にも出場し、ラグビーを仲間と一緒にエンジョイする中で、自他共に認めるラグーマンに成長させていただくことができた。

私にレフリーをやってみないかと奨めてくれたのは高橋先生であった。私自身も日本協会のトップレフリーとして活躍し、レフリーの重要さ、楽しさを理解していた先生からの誘いの言葉に、小踊りするような喜びと身の引き締まるような緊張を味わったものだった。その年の夏、関東協会のB級レフリー認定講習会に参加させていただいたところ、幸運にも資格を取ることができたのである。さらに幸運だったのは、私のレフリングを見た講習会の講師であった池田正徳先生（成蹊大学教授）と川口貢先生（横浜国立大学教授）が「奈良の笛は動きがおもしろいし、ジェスチャーもはっきりして良い」との評価をくださったことであった。このことに意を強くした私は、本気でレフリーに取り組む決心をしたものだった。はからずも、その年のシーズンから大学や社会人の笛が吹けるようになり、レフリーとしてのスタートを切ることが出来たのである。高橋先生をはじめ、池田、川口両先生のお陰であった。

以来、平成元年にやめるまでの約12年間、日本協会のトップレフリーに登りつめることができ、高校・大学・社会人や国際試合など、多くの笛を吹かせていただくことができた。このことは私の人生にとって大きな財産となった。

昭和62年、私は学校現場から県の体育課に転勤し、運動競技係ということで各種大会、国体誘致、国際スポーツ交流等を担当してきた。御承知のように埼玉県は中国の山西省と友好締結を結び、オーストラリアのクィーンズランド州・メキシコのメキシコ州と姉妹提携を結んでスポーツの交流を行っているが、クィーンズランド州との交流を担当した私は、昭和63年の1月に州高校選抜ラグビーチームを埼玉に迎え、県協会の方々、県高体連ラグビー

専門部の先生方の協力を得て、交歓試合を含めた友好親善行事をやり遂げることができた。また、同年8月には尾崎監督、塚田コーチ（熊谷工業高等学校教諭）を中心とした埼玉高校選抜チームをクィーンズランド州にスポーツ交流団として派遣することができ、私も同行して職務を果たしながら、ラグビーを満喫することができた。県協会、専門部の皆さんの協力に感謝申し上げたい。

現在、熊谷市のスポーツ文化公園（仮称）に県営ラグビー場が建設中であるが、私はその基本設計の段階で参画することができた。その際、県内ラグビー関係者の英知を設計に反映させる意見が寄せられ、取りまとめて要望した結果、大部分が設計に盛り込まれ、現在着々と工事が進行している。完成の暁には埼玉ラグーマン待望の日本一のラグビー場となることを期待している。

何も知らない素人から始めたラグビーであったが、多くのラグビー仲間を支えられ今日を迎えられたことに感謝したい。40歳の半ばを過ぎた現在であるが、ラグビーに対する思い入れはますます強くなるばかりである。これからも多くの仲間と共にラグビーを楽しみ、微力ながらラグビー発展のために努力していきたいと考えている。



国体の開会式入場行進